

<研究データ>

- AI for Scienceで扱うことのできるデータ量の見極めが重要。日本が潜在的に強い領域であっても、データの蓄積が少ない場合においては、データ化するメカニズムの導入が必要。
- どの領域にどのぐらいのデータが蓄積されているか、AIで学習可能なデータがどれだけあるか、について精密な調査・議論をしたほうが良い。
- AI for Scienceスパコンとの連動性（産出されたデータやメタデータが自動的に集約される仕組み）や、データファクトリー政策（下流側のデータ利用を見据えた上での上流側でデータ産出する仕組み）を戦略の柱とすることが重要。
- 今後どういうデータが取得できるかが重要。当初の目的と違う用途で取得されたデータであっても、それを変換することで利用できるケースがあるため、データの質を含めてどのようなデータが大量に取得できるかを検討し取り組むことが重要。
- オープン・アンド・クローズ戦略に、時間軸（論文執筆時期はクローズにするなどの考え方）があると良い。また、国際共同研究と連動する設計が必要。
- データ保護の必要性は理解するが、できるだけ簡素にすべき。日本国内のみのルールである故に、他国の人は利用できるが日本人だけ利用できないという状況は避けるべき。
- 埋没しているデータや公共データを、AI for Scienceで利用可能な状態にするためのプラットフォーム整備やインセンティブ設計（計算リソースの優先措置など）が必要。

<人材育成>

- 戦略方針（素案）の各論7(2)について、解像度を上げた方が良い。2段落目での支援対象に「社会人ドクター」を明記し、3段落目でのAI関連人材の裾野拡大を行う機関に「国研」に加えるなど。
- 論文を出すことにとらわれず、データの公開作業をする、データベースの整備をするなど、研究者とは違った人たちの存在も重要。

<重点分野>

- 現状、パワープレイすることができない、またはデータ量で見劣りする領域であっても、日本として重点化したい領域は、データを取得できる仕組みを構築することも必要。

<アプリケーション・ソフトウェア>

- 研究基盤、データに加えて、ソフトウェアもAI for Scienceとして非常に重要になる。
- AI for Scienceのためのソフトウェア（ロボット連動ソフト、AI連動ソフトなど）が開発されても埋没してしまうことが懸念される。積極的な公開を促すメッセージの発出や、共有される場の形成についても検討すべき。
- AI for Scienceのためのソフトウェア開発者に対する積極的なインセンティブ施策（計算リソースの優先措置など）が必要。
- 研究力の底上げを図るためのソフトウェア活用に関する要素（ソフトウェアの数や普及度合い等）が目標に掲げられていると良い。
- データとソフトウェアは不可分。データがあればそれを使うツールも必要で、ツールはデータ無しでは動かないという考え方でソフトウェアを設計する必要。また、ツールの品質保証の仕組みの検討も必要。

<その他>

- AI for Scienceの出口として、論文数だけでなく創出されたインパクト（新材料、新薬等）が重要。このようなインパクトをいかに創出するか、どのように増加させるかに対して、多産多岐的な考えが必要。そのために、研究を加速させるAIが必要であり、そのようなAIを量産するための研究基盤、計算基盤、データ基盤が必要。
- 特定の分野をリードするためには、2000人で100万GPUぐらいの規模感の計算資源が必要であり、官民一体で整備していくことが必要。

<AI for Scienceによる科学研究革新プログラムについて>

- 「AI for Scienceによる科学研究革新プログラム」のチャレンジ型については定常化する方向で発展させてほしい。また、チャレンジ型とプロジェクト型の差が非常に大きいので、ステップアップしていけるようなミドルクラス事業を検討いただきたい。
- チャレンジ型の500万円の主な使い道として計算資源を想定しているが、今回のターゲット層は計算資源を使える層ではないのではないか。一方で、データセット構築のための費用が重要。データ整理に特化した人材がいないとデータが死蔵してしまう。それを構造化することが重要。
- 半年で500万円の使い方が難しいので、公募の際に事例紹介等をしてほしい。
- チャレンジ型について、政治含めた様々な社会科学等の人文系からも応募したいという声を聞く。そのあたりまで対象に含めると良い。
- AI分野の成果はコンペティションから生まれている例もある。チャレンジ型では参加するしかできないかもしれないが、例えばプロジェクト型でコンペティションを主催する等できないか検討してほしい。